本当になった阪大歯の正規教授
～この5年で何をしてきたか～

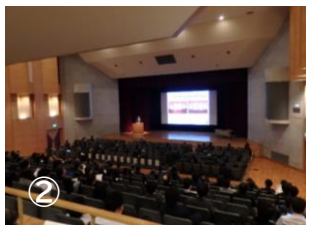
大阪大学大学院歯学研究科
　　イノベーティブ・デンティストリー推進センター　特任教授・招聘教授
株式会社アイキャット　代表取締役CTO
昭和63年(1988年)入局

十河基文（そごう）

⚠：本抄録は文章が長いのでよろしければ写真だけご覧ください

日本の29歯学部・歯科大学のうち，7校8教室で毎年「学生講義」をしている．これまで講義の枕として「40歳代の阪大総長を目指して，卒後5年目で2補の教授選に応募した」ことをTV番組“しくじり先生 俺みたいになるな!!”的に話をしてきた．しかし2018年，卒後30年目にして5年という特殊な有期雇用であったが（やっぱり教授は10年必要です），大阪大学大学院歯学研究科の正規教授に着任した．長島先生，池邉先生，十河と阪大歯の教授会の中で3名も2補出身がいたことになる．

任期中十河は何をしてきたかを振り返ると，コロナ禍で十分なことはできなかったが，阪大(歯)初の自治体3市との協定締結(①)，臨床ニーズ発表会(②)とそれに続く歯病の見学会(③)，学内限定のセミナー「歯科ブラックジャック臨床講座」のマネージメント(④)，潰れていた振子時計(1966年同窓会寄贈)の電波時計改造とデジタルサイネージの学部玄関への設置(⑤)，阪大歯病(⑥)ならびに研究科(⑦)の統一白衣の作成，視覚障害者が触ってわかる8倍大歯模型のクラウドファンディング(⑧)，ドローン撮影も行ったが低予算による歯学部創立70周年の動画作製(⑨)等々に加え，主たる仕事は部局における特許を含めた「産学連携」の支援である．

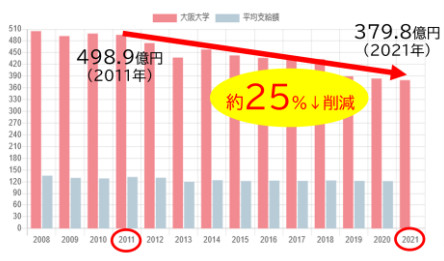


NHKニュース

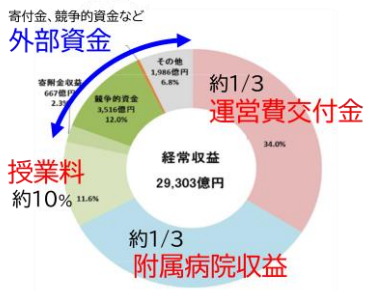
奥野善彦先生が写っている

大学は昔，「臨床」「研究」「教育」の3本柱といわれていた．しかし今ではもう1つ柱が加わったが，それが「産学連携」である．国債発行でしのいではいるが大変な日本の国家財政．国立大の阪大も文科省から貰える「運営費交付金」を調べるとこの10年で25%も減額され，歯学部では2018年からの5年間で教官15名（教授1，講師1，助教13名）の定員削減が行われた（最初からの約束で十河はその1人）．そんな状況下で「大学の収益」を補う手段としては「外部資金」しかなく，その1つが「産学連携」である．

2019年秋以来のリアル開催の同門会．その名誉ある「講演会」では，十河がこの5年間で行いまだまだ今後も続く「産学連携」について，また途中から阪大歯の見本になるべく自分の研究/開発/特許/薬事を含めて「医療機器開発」の大変さをわかりやすくお話出来ればと思う．



阪大全体に来る「運営費交付金」の推移



国立大学の収入の内訳